

五世紀初頭における中国仏教の戒律観

采 畢 晃
(大谷大学)

序

五世紀初頭は、中国仏教の戒律にとってはきわめて重要な時期である。というのも、この時期に相次いで四大広律が訳出されたからだ。四大広律伝来以前の中国での律に対する態度は、既に横超慧日「広律伝来以前の中国に於ける戒律」において、釈道安を中心として明らかにされている。横超は、釈道安に着目する理由として、

道安の没後半世紀を出でずして四部の律が伝はつたが、その受け容れに準備態勢を整へたのは、道安の門下生並びにその関係者であつたことを忘れてはならない。⁽¹⁾

と述べ、釈道安が四大広律伝来以前におけるキーマンであったことを挙げている。しかし、その釈道安は、広律の伝来を待たずして没した。四大広律伝来以前のキーマンが釈道安であるとすれば、四大広律伝訳当時のキーマンは鳩摩羅什であると言っても良いだろう。

弘始六(四〇四)年に訳出された『十誦律』は、弗若多羅と曇摩流支が誦出したものだが、これを漢語へと移したのは鳩摩羅什であった。また、その『十誦律』を改訂したのは、鳩摩羅什授戒の師である卑摩羅叉であった。弘始一

二（四一〇）年に『四分律』を訳出したのは仏陀耶舎と竺仏念であった。仏陀耶舎は、鳩摩羅什の師とされる人物であり、そもそも仏陀耶舎が中国へと渡ってきたのは、鳩摩羅什の求めに応じたが為であった。義熙一四（四一八）年に『摩訶僧伽律』を訳出したのは、仏駄跋陀羅と法顯であったが、この二人は、鳩摩羅什とは必ずしも友好的ではなかったとされている。仏駄跋陀羅は、鳩摩羅什の弟子達によって長安を攢斥せられた。また、法顯は、天竺に向かうに当たって、当時鳩摩羅什がとどまっていた姑蔵をわざわざ避けるようなコースを取っている。景平二（四二四）年に訳出された『彌沙塞部和醯五分律』は、長安における鳩摩羅什の訳場で学んだ竺道生が、仏陀什とともに訳出したものである。

もっとも、鳩摩羅什を中国に広律をもたらしたキーマンであるというには、違和感をぬぐいきれない。それというのも、鳩摩羅什という人物には、どうしても「破戒者」という印象がつきまとうからであろう。では、右のように鳩摩羅什が広律伝来時のキーマンであるように映るのは、鳩摩羅什が活躍した時代に釈道安が準備したルールが偶々あったからに過ぎないのだろうか。以下、その点を確認していくことにしたい。

一

そもそも、鳩摩羅什は、いつ、どこで、破戒したのであろうか。「鳩摩羅什伝」は次のように述べる。

光（呂光）、既に什（鳩摩羅什）を獲るも未だ其の智量を測らず、年齒尚ほ少きを見て、乃ち凡人として之を戯れ、妻を強ひるに亀茲の王女を以てす。……。什、逼られて既に至り、遂に其の節を獻く。

ここでは、亀茲を攻めて鳩摩羅什を拉致した呂光によってむりやり破戒させられたように記されている。もっとも、

「年齒尚少」という記述が鳩摩羅什の年齢とは合わないということ等から、この記述はそのまま信じられない。では、実際はどうだったのだろうか。

これについては、塚本善隆が興味深い説を提出している。⁽³⁾ 鳩摩羅什母子が罽賓から亀茲に帰る途中、月氏北山で一人の阿羅漢が母親著婆に対して「この沙弥を常に守護せよ。もし三十五歳になっても破戒することがなければ、大いに仏法を興し数多くの人を度すこと遍波拘多と同様の優れた仏者となるであろう。もし戒を全うすることがなければ、大したこともできず、単に才明にして俊芸の法師に過ぎないであろう」と予言したという記事に注目し、このエピソードは、鳩摩羅什の破戒の事実を弁護するために創作されたものであろうとする。ここから、塚本善隆は、鳩摩羅什の破戒は三十五才であり、それは伝記が伝える通り、呂光が亀茲を陥落し鳩摩羅什を捕虜とした歳（三八四年）であろうと推定する。

この塚本説に対して、鎌田茂雄は、三十五歳で呂光に捕らえられた歳に破戒したのだとすれば、『出三藏記集』や『高僧伝』の記事中に見える「其の年、尚は少きを見て」という言葉が妥当なものではなくなるとして、鳩摩羅什の破戒はむしろ「其の年、尚少き」ときから恒常的ななされていたものであろうと推測する。⁽⁴⁾ さらに、鳩摩羅什に破戒を迫ったのは、呂光ではなく、その長庶子の呂纂であったらという、上原専祿の研究を参照しつつ、呂光が破戒させたという記事は信頼ができないとする。同様に、長安に入ってから、姚興が鳩摩羅什の子種を保存するために破戒を迫ったという記事も併せて、権力者が強制して鳩摩羅什に破戒させたのであり、破戒は鳩摩羅什の意志ではなくやむを得ないものであったこととするための僧伝編者の弁解であるとし、『晋書』に見られる鳩摩羅什自身が女性を求めたという記事をも参照する。その上で、鳩摩羅什の破戒は亀茲から長安に至るまで恒常的ななされていたのである

うと推測する。特に、鎌田茂雄は、鳩摩羅什が受戒した後にそのもとを離れる母親耆婆の言葉に着目する。

年二十に至りて戒を受くること王宮に於いてす。卑摩羅叉従り『十誦律』を学ぶ。頃く有りて什母辞して天竺に往かんとす。……什母去るに臨みて什に謂ひて曰く、「方等の深教、応に大いに真丹（中国）に聞かるべし。之を東土に伝ふは唯だ爾（なんじ）の力なり。但し自身に於いては利無し。其れ如何んす可けんや」と。⁽⁵⁾

鎌田は、耆婆が天竺に行こうとするのは、具足戒を受けてまだ間もない鳩摩羅什が破戒したからではなかったかと推測する。耆婆は、破戒した鳩摩羅什に失望し、自分自身だけでも清浄な戒律を守った生活を送って息子鳩摩羅什の罪の償いをしようとしたのであったろうとするのである。

しかしながら、そもそも、耆婆が天竺に旅立つに際して鳩摩羅什に語ったとするこの説話は、鳩摩羅什が中国にやってくることを正当化しようとする目的のもとに、中国の伝記作者が創作したものと見るのが妥当であろう。鳩摩羅什は、中国人が誘拐して中国に連れてきたものではなく、中国に来るべき因縁がはじめからあったのだとするのが、この説話の趣旨である。もちろん、このエピソードの中から「真丹」や「東土」といった中国を意味する単語を除外したものが史実であったと考えることも可能であろうが、このエピソード全体が創作であると見る方が自然である。

これらに加えて、鳩摩羅什がかなり早い時期から破戒していたことを思わせる記述として、「鳩摩羅什伝」中に見られる次の表現を挙げることもできる。

性、率達にして小検を^{つと}研めず。修行者頗る之を非とするも、什、自ら心を得て未だ嘗て意に介せざりき。⁽⁶⁾

鳩摩羅什は、非常に大らかな性格で、「小検を^{つと}研め」ることがなかった。「小検」が具体的にはどのようなことを指しているのかは示されていない。⁽⁷⁾しかし、他の修行者が眉をひそめるようなものであった。つまり、内面的なことを述

べているのではなく、具体的可視的な行動において鳩摩羅什が他の修行僧の顰蹙を買うような態度を取っていたということがある。これは鳩摩羅什の破戒乃至それに準ずるような行動を指していると考えた方が自然である。そのような周囲の声に対して、鳩摩羅什は自らをよしとしてそれに耳を傾けることはなかったという。他の修行者が眉をひそめるほどのことを「小検」と言い得るかは、甚だ疑問である。ここですでに鳩摩羅什はかなり重大な破戒をしていたかのように読み取り得る。『出三藏記集』『高僧伝』ともに受戒以前の事件として挙げており、三十五歳や二十歳よりはかなり早いうちから破戒していた可能性もある。あるいは、三十五歳や二十歳という年齢もまた、鳩摩羅什の破戒を少しでも遅いものにしようとして創作されたものである可能性すらある。

ところが、これら対して、早くに破戒していたとする推測を否定する材料も見出されるのである。

長安に滞在する鳩摩羅什のもとに龜茲で戒を授けてくれた卑摩羅叉がやってくる。この時卑摩羅叉は鳩摩羅什に対して「お前が戒を授けた弟子は何人か」と訊ねるのだが、これは卑摩羅叉が「未だ逼らるるの事を知ら」ないために発した質問だとされている。⁽⁸⁾「卑摩羅叉伝」によると、卑摩羅叉は呂光による龜茲陷落の際にその地を離れたとされている。⁽⁹⁾もし、鳩摩羅什が呂光に拉致される以前から破戒していたのであれば、近くにいた授戒の師がその事実を知らないというのも不自然である。この記事を信頼するとすれば、鳩摩羅什が破戒したのは、早くとも呂光に捉えられて以降のことであるということになる。

また、仏陀耶舎が鳩摩羅什の求めに応じて龜茲から姑蔵に至った際、鳩摩羅什が姚興に迫られて破戒してしまったことを聞いた、という記事が「仏陀耶舎伝」に見られる。⁽¹⁰⁾仏陀耶舎は鳩摩羅什の求めに応じて龜茲を出発したのであるから、道中鳩摩羅什に関する情報を収集しながら東に向かったと考えられる。その仏陀耶舎が、ようやく姑蔵に至

ってから、しかも姚興によって破戒させられたということを聞いたというのである。この記事は「鳩摩羅什伝」の外にあるだけに伝記記者の意図が混入しがたく、却って信頼性が高いとも言えよう。もしこれを信頼するとすれば、鳩摩羅什が破戒したのは、ようやく長安に入ってからのことであるということになる。

このように、鳩摩羅什の生涯において非常に大きなトピックである破戒という事実は、一般には信頼できるとされている諸資料の間でも矛盾が生じている。果たして、これらの矛盾は解消しうるものであろうか。おそらくは、新資料の発見でもない限り、矛盾無く鳩摩羅什の破戒を描くことは無理なのではないかと思われる。本論においても、いずれが歴史的事実であったかを判定することを目的とするのではない。むしろ、歴史的事実よりも、いずれの資料も当時の〈雰囲気〉を示すものとして読むことが可能であろう。このような視点で諸資料を読み直してみると、次のような諸点が見えてくる。

- ・鳩摩羅什が女犯によって戒を破ったということは、人々によく知られたことであった。（そして、事実でもあった。）
- ・鳩摩羅什が破戒したのがいつであったかは、分らない。
- ・どのような経緯で破戒したのかは、分らない。従って、女犯が鳩摩羅什自身の意志によるものであったのか、強制されたものであったのかという点についても、分らない。
- ・鳩摩羅什の女犯は一度きりのものであったのか、継続したものであったのか、という点についても、分らない。このように、破戒が事実であったとしても、公平に見れば、その具体相は全く「分らない」「分らない」ということは、鳩摩羅什がその点に関しては全く語らなかったということをも示していよう。いずれの「鳩摩羅什伝」も、

鳩摩羅什が西域にあった当時の記事を豊富に載せている。鳩摩羅什が亀茲にいた当時ですら、遠く釈道安の耳にまでその令名が伝わってきていたのであるから、直接鳩摩羅什の口から聞かずとも、ある程度の情報は中国人自身が持っていたと考えることもできる。しかしながら、少なくとも亀茲大悟以前の事柄に関しては、直接鳩摩羅什自身の口から聞かねばならなかったはずである。ところが、諸伝にはこの時期についてもきわめて豊富な記事を伝えている。かくも詳細な記事が残されたのには、鳩摩羅什自身がそれらの内容を語ったのであらうと考えられる。それに対して、破戒に関しては、早くも『出三蔵記集』と『高僧伝』の間ですら齟齬が生じている。これは、伝記（素材の）記者達が、本人乃至実情を知る者による一次資料を持っていなかったことを示す。そのために、鳩摩羅什の破戒については、かくも雑多な資料がのこされているのである。このことは、鳩摩羅什をめぐる当時の雰囲気が、彼の破戒というトピックに支配されていたことを示すものであるとも言えよう。

二

では、その「当時の雰囲気」とはどのようなものであったか。

鳩摩羅什の人となりは次のように語られている。

什の人と為^なり、神情映徹にして、傲岸なること群を出でたり。機に応じて会を領すること、其の正^{ただち}ぶもの有ること鮮^{すくな}し。且らく篤性仁厚にして、汎愛を心と為し、己を虚うして善誘すること、終日倦^うむこと無し。⁽¹¹⁾

しばしばこの記述の中で「傲岸出群」の四文字だけが注目されて鳩摩羅什がきわめて傲慢な人物であったと描出されることが多い。だが、ここからは、「傲岸出群」と他の文とがなかなかマッチしないのである。傲岸な人間が、「機に

応じて会を領」したり、「汎愛を心と為」したり、「己を虚しくして善誘し、終日倦むこと無し」ということがあるだろうか。おそらく、「傲岸出群」の句は、鳩摩羅什に対して批判的であった人々からの評価を表したものであろう。鳩摩羅什をめぐることは、批判的な声がかなり大きかったことが窺える。

また、鳩摩羅什と卑摩羅叉との対話の中にも、当時の鳩摩羅什周辺の雰囲気を読み取ることができる。そもそも、卑摩羅叉は何故「弟子は何人いるのか」という質問をしたのであろうか。もちろん、単に愛弟子の活躍ぶりを分かりやすい数字として聞きたかっただけということも考えられよう。しかし、すばらしい能力を持っていたはずの弟子がそれにふさわしい尊敬を受けていない様子に怪訝な思いを持ったためであると考えた方が自然であろう。卑摩羅叉の問に対する鳩摩羅什の回答を見ると、「師敬」を受けないことの言い訳のように読める。卑摩羅叉は、鳩摩羅什が中国人から「師敬」を受けていない様子なのを不審に思い、「弟子は何人いるのか」という質問をしたのだと考えられよう。「師敬」ということが具体的にはどのようなことなのかはよく分からない。「受法の弟子」がその師に対してはらう敬意だということまでは予想できるが、それは一般的な尊敬の態度のことなのか、あるいはもっと具体的な儀礼的なものなのか。いずれにせよ、鳩摩羅什が当然受けるべき尊敬を漢人僧から受けていなかったことは間違いない。その原因は、鳩摩羅什が自ら言うように、「業障の深きに累はさる」ためであつたらう。この言葉が鳩摩羅什の破戒を指すものであることはほぼ疑いがない。まして、鳩摩羅什の破戒は、過去のできごとではなく、現に、僧坊に住することもなく、妓女十人とともに豪華な供養を受けて生活していたのであり、しかも、これは多くの人の知るところであつた。

もっとも、鳩摩羅什はそれらの厚遇に得々としていたわけではなかった。『高僧伝』『慧遠伝』に収められている

「重与什書」によると、鳩摩羅什は本格的に經典を訳出し始める前に本国に帰ろうとしていたことが窺われる。⁽¹²⁾ 伎女十人を侍らせ供給あふれんばかりであった鳩摩羅什の長安での生活は、単に姚興のみによって保証されていたに過ぎず、決して心楽しきものではなかったと考えられるのである。

そのことは、『注維摩』に見られる「犯律の人は、心常に戦き懼る。若し其の罪相を定め、復た加へて以て之⁽¹³⁾（犯律の人）をせ切むれば、則ち心擾れて罪増すと謂ふべきなり。」という鳩摩羅什自身の言葉からも窺える。

また、『十誦律』訳出に当たって、誦出という重要な立場をわざわざ避け、伝訳の立場にとどまっている。果たして鳩摩羅什には単独で『十誦律』を翻訳する力がなかったのであろうか。おそらくそうではあるまい。鳩摩羅什が博覧強記の人物であったということによるばかりではない。鳩摩羅什自身、卑摩羅叉を師として『十誦律』によって受戒しているのであり、破戒したというのはものの、還俗したわけではなく、僧として『十誦律』の影響下にあったはずだからである。こと、鳩摩羅什は、没する直前に、『十誦律』について「唯だ『十誦』の一部のみ未だ刪煩に及ばず⁽¹⁴⁾」などと述べていることから、『十誦律』に対してもかなりの見識を持っていたことが知られるのであり、誦出することができなかつたなどとは考えられない。それにもかかわらず、その誦出を弗若多羅や曇摩流支に依頼したのは、やはり、鳩摩羅什自身の破戒という事実が影響したと考えられる。鳩摩羅什が自らの破戒についてかなり引け目を感じていたことは、講經のたびにその冒頭で「譬へば臭泥中に蓮華を生ずるが如し。但だ蓮華を採りて臭泥を取る勿れ⁽¹⁵⁾」と断っていることに典型的に表れている。また、死に臨んで「若し所伝に謬り無くんば、焚身の後、舌をして焦爛せざらしめん⁽¹⁶⁾」などと言つたと伝えられているが、ここからは、破戒によって傷ついた僧としての信頼性を何とか取り戻そうとしている鳩摩羅什の苦悩が看取できよう。鳩摩羅什は、自らは破戒者としての生活を送りながらも、仏教全

体に対する信頼は厚いものがあつた。それゆえ、彼がその内面においても律を軽んじていたとは考えられない。おそらく、破戒者である自らが全面的に翻訳の主宰者となることによって中国人が律に対してわずかも侮蔑の感情を持つことを避けたかったのであろう。

このように、鳩摩羅什はきわめて慎ましい態度を取っていたが、それは周昉が鳩摩羅什の破戒という事実に対して、寛容とはほど遠い雰囲気が大きく作用していたと考えられる。

鳩摩羅什の長安での状況を考えるには、仏駄跋陀羅との関係を確認するのが便利である。仏駄跋陀羅は、鳩摩羅什没後に、法顕が将来した『摩訶僧祇律』を訳出しており、広律伝来の重要人物の一人でもある。また、鳩摩羅什没後、鳩摩羅什の弟子達によって長安を擯斥せられたことでも知られ、鳩摩羅什との関係においても注目すべき点がある。

さて、仏駄跋陀羅が長安にやってきたのは、そもそも鳩摩羅什がいるということを知っていたからであつた。⁽¹⁷⁾二人は意気投合するが、仏駄跋陀羅が「あなたの解釈は、あくまでも人智の範囲内であつて仏の智慧にはほど遠いにもかかわらず、あなたの評判が非常に高いのは何故か」と訊ねた。これに対して鳩摩羅什は「私が年老いているからに過ぎません」と答えるのだが、これに続く「何ぞ必ずしも能く美談と称せん」という言葉のニュアンスがやや不明瞭である。次のような三つの解釈が可能であろう。

- ①「致高名」に対しての言葉だとすれば、単なる謙遜を示すものとなる。
- ②「君所釈。不出人意。而致高名」に対するものだとなれば、これは中国人に対する批判となる。「中国人に対して示す解釈が「不出人意」のものであることは自らが重々承知している。しかし、中国人には、その程度のものではなければ受け容れられないのだ」といった意味合いをもったものということになる。

③或いは、自らの直前の言葉である「吾年老故爾」という言葉に対するものだとも考えられる。つまり、鳩摩羅什がもてはやされているのは、単に鳩摩羅什の年齢がそのようにさせるだけであって、「所釈」が優れたものであるからではないという意となる。

いま、②番目の説の可能性を確認してみたい。鳩摩羅什は、常に自らには「迦旃をしのぐほどの大乘の阿毘達磨論書を著す力がある」と言っていた。⁽¹⁸⁾ここにいう「迦旃」とは迦旃延尼子のこととて、説一切有部の教義を体系づけて『発智論』を著した人物である。鳩摩羅什自身もまた母親とともに西域に留学した際、熱心にその教学を学んだのであった。そしていま鳩摩羅什は、もし自分が大乘の阿毘曇を作ったならばその迦旃延尼子の作をしのぐであろうと言うのである。また、鳩摩羅什は、「中国には仏教に対して深い知識を持った者が少なく、私は実力を発揮することもできず、羽を折った鳥のようなものだ」という。即ち、鳩摩羅什は中国人の理解能力に大きな不満を持っているのである。鳩摩羅什訳は名訳をもって知られるが、しかし、彼と漢人との意志疎通は決してスムーズなものではなかったことは、翻訳に尽力した僧叡によるいくつかの経序からも窺える。

また、仏駄跋陀羅は、鳩摩羅什が長安で論議を交わしたことが記録されている唯一の人物でもある。言うまでもなく、鳩摩羅什は、翻訳ではなく、論議において自らの能力を認めていたのであった。

では、仏駄跋陀羅と鳩摩羅什との間にも、個人的な確執があったのであろうか。右に挙げた仏駄跋陀羅との会話の後に示される「什共有疑義必共諮決」という文からはそのような形跡は見いだせない。むしろ、良好な関係を保っていたのではないかとさえ感じさせられるのである。もっとも、その弟子たちの関係は、必ずしも友好的なものではなかった。

結

鳩摩羅什が破戒したことは間違いない。

破戒者であるが故に、鳩摩羅什についてはまことしやかな陰口が横行していたようである。おそらく、「才明にして俊芸の法師」（小賢しく器用なだけの法師）という評価は、当時の長安において為されていたものではなかったか。

鳩摩羅什は、これらの批判を甘受していたようである。それは鳩摩羅什自身も戒律の重要性を認めていればこそであった。鳩摩羅什の生の言葉は『注維摩』『大乗大義章』などに見出すことができるが、そこには、戒律を重視する言葉は枚挙にいとまないものの、これを軽視するものは全く見当たらない。鳩摩羅什が戒律を軽視したかのような評価は、当時の長安近辺で行われていた評判の類であり、おそらく正確なものではないだろう。

もっとも、そのような鳩摩羅什を批判する声もまた、戒律を重視すればこそだったのである。この雰囲気醸成するに当たって先の釈道安が大きな努力を払ったことはすでに横超慧日の論文が明らかにするとおりである。結果として、鳩摩羅什の教団は鳩摩羅什没後ほどなくして解散状態になり、鳩摩羅什の没年すら慧皎の時には分からなくなってしまった。

表面上、両者にはすれ違いが大きい。しかし、戒律に対する真摯さにおいては異なることがなかったのである。

註

- (1) 横超慧日『広律伝来以前の中國に於ける戒律』『中国仏教の研究第一』一四―一五

- (2) 光既獲什。未測其智量。見年齒尚少。乃凡人戲之。強妻以龜茲王女。……。什被逼既至。遂獻其節。
- 「鳩摩羅什伝」『高僧伝』（大正新脩大藏經 五〇卷・三三一頁 下段）以下（大正 五〇・三三一 c）のように略。『三藏記集』（大正 五五・一〇〇 c 一〇一 a）にも同意の文あり
- (3) 塚本善隆『仏教史上における肇論の意義』『肇論研究』（一三四―一三五頁）
- (4) 鎌田茂雄『中国仏教史』第二卷（二二二―二二五頁）
- (5) 至年二十受戒於王宮。從卑摩羅叉學十誦律。有頃什母辭往天竺。……什母臨去謂什曰。方等深教応大闡真丹。伝之東土唯爾之力。但於自身無利。其可如何。
- 「鳩摩羅什伝」『高僧伝』（大正 五〇・三三一 a）。『三藏記集』には無し。
- (6) 性率達不斫小檢。修行者頗非之。什自得於心。未嘗介意。
- 「鳩摩羅什伝」『三藏記集』（大正 五五・一〇〇 c）。高麗本は「未常懈意」に作るが宋元明の三本は「未嘗介意」とする。後者を取る。『高僧伝』（大正 五〇・三三〇 c）もほぼ同文。
- (7) 「小檢」という語は、唐の湛然以降には「小乗の戒律」といった意味あいでも用いられているのが確認できる。但し、鳩摩羅什伝のこの部分は、『三藏記集』『高僧伝』ともに龜茲大悟以前の出来事として描いている。従って、ここでの「小」字に、「小乗の」といった意味を読み取るとは深読み過ぎる可能性がある。「鳩摩羅什伝」中の「小檢」は、「つまらぬつましさ」ぐらいの意味にとつておいた方がよいであろう
- (8) 初什在龜茲。從卑摩羅叉律師受律。卑摩後入閼中。什聞至欣然師敬尽礼。卑摩未知被逼之事。因問什曰。汝於漢地大有重縁。受法弟子可有幾人。什答。漢境経律未備。新経及律多是什所伝。出三千徒衆。皆從什受法。但什累業障深。故不受師敬耳。
- 『三藏記集』（大正 五五・一〇一 c 一〇二 a）。高麗本は「故不受師教耳」とするが宋元明の三本は「故不受師敬耳」とする。後者を取る。『高僧伝』（大正 五〇・三三二 c）もほぼ同文。
- (9) 及龜茲陷沒乃避地焉。
- 「卑摩羅叉伝」『高僧伝』（大正 五〇・三三三 b）
- (10) 行達姑臧。而什已入長安。聞姚興逼以妄勝勸爲非法。乃歎曰。羅什如好綿。何可使入棘中乎。

(11) 『出三藏記集』「仏陀耶舎伝」（大正 五五・一〇二b）。『高僧伝』「仏陀耶舎伝」（大正 五〇・三三四a）もほぼ同文
什為人。神情映徹。傲岸出群。応機領會。鮮有其疋。且篤性仁厚。汎愛為心。虚已善誘。終日無倦。

『出三藏記集』（大正 五五・一〇一c）。『高僧伝』（大正 五〇・三三二c）もほぼ同文。

(12) 遠重與什書曰。日有涼氣比復何如。去月法識道人至。聞君欲還本國。情以悵然。先聞君方當大出諸經。故來欲便相諮求。若此傳不虚衆恨可言。

「慧遠伝」『高僧伝』（大正 五〇・三五九c）三六〇a）

(13) 犯律之人。心常戰懼。若定其罪相。復加以切之。則可謂心擾。而罪增也。

『注維摩詰經』（大正 三八・三五五b）

(14) 『高僧伝』（大正 五〇・三三二c）

(15) 『出三藏記集』（大正 五五・一〇一c）。『高僧伝』（大正 五〇・三三二c）も同文。

(16) 『出三藏記集』（大正 五五・一〇二a）。『高僧伝』（大正 五〇・三三三a）もほぼ同文

(17) 頃之至青州東萊郡。聞鳩摩羅什在長安。即往從之。什大欣悅。共論法相。振發玄緒。多有妙旨。因謂什曰。君所釈。不出人意。而致高名。何耶。什曰。吾年老故爾。何必能称美談。什共有疑義必共諮決。

『出三藏記集』「仏大跋陀伝」（大正 五五・一〇三c）

(18) 常歎曰。吾若著筆作大乘阿毘曇。非迦旃比也。今在秦地深識者寡。折翮於此。將何所論。乃悽然而止。

『出三藏記集』（大正 五五・一〇一c）。『高僧伝』もほぼ同文。